

❁ ラテンアメリカを知る

International Relations Self-Study Navigator

ラテンアメリカを知る 目次

1. ラテンアメリカとは
2. 学習・研究の方法
3. 入門的な資料等の紹介
4. 発展的な資料等の紹介

1. ラテンアメリカとは

「われわれラテンアメリカ人が貧しいのは、われわれの踏んでいる大地が豊かだからだということ、自然によって特権を付与されている地域が歴史によって呪われてきたということ、明らかにしている」

これは、ウルグアイの卓越したジャーナリスト、エドゥアルド・ガレーノが 1971 年に出版した世界的ベストセラー、『ラテンアメリカの切り開かれた血脈』（邦訳『収奪された大地：ラテンアメリカ 500 年』）の証言である。この著書は、また従属論的立場から書かれたラテンアメリカの通史としても有名である。われわれ日本人にとって、この地域の「豊かさ」と「貧しさ」がなんら結びつけられることなく広くイメージされている。アマゾンのジャングル、最高峰アコンカグアを頂くアンデス山脈、「大足の男の地」を意味する最南端のパタゴニアといった自然、インカ文明、マヤ文明、アステカ文明の遺跡や歴史、ボサノバ、サンバ、タンゴ、レゲエ、サルサ・・・など数多くの中南米音楽にあこがれる日本人は少なくない。他方、ラテンアメリカの「政治」や「経済」については、革命・反乱とクーデター、暴力・暴動、テロ、麻薬とマフィア、貧困、ストリートチルドレン、インフレ、膨大な累積債務・・・などがいまだ一般的イメージであろう。先住民族であるインディオがメキシコ中央部や中央アンデス地域に集中していて、カリブ海地域では少数であるのはなぜなのか。そもそも、この大陸が先住民に由来した「インド・アメリカ」ではなく、なぜ「ラテンアメリカ」と呼ばれるのか。

今から十数年前の 1992 年には、コロンブスによる「新大陸発見 500 年」（最大限、中立的・妥協的に表現しても「二つの大陸の歴史的遭遇の 500 年」だが）を記念した祝典が関係諸国で行われたに。もちろん、「1492 年」の意味は、ヨーロッパ世界と非ヨーロッパ世界とでは全く異なっていることは、その後の世界史の展開過程が明らかにしていることである。ラテンアメリカの民衆にとって、その後の 500 年は非文明・野蛮として他者化され、世界的な支配システムに包摂され、収奪される過程であった。ラテンアメリカの地は、「歴史によって呪われてきた」のである。

とは言っても、この大陸の「われわれラテンアメリカ人」の自己主張は、様々なかたちで発せられた。1804 年のハイチから始まる独立と国民国家形成の動き、メキシコ革命、キューバ革命をはじめとした民族的、社会主義的の革命、19 世紀から今日まで継続する各地でのインディオの抵抗、経済的自立や政治的民主化の動き等々。ここで注目したいのは、これらの自己主張の主体である「われわれ」という一体性と「われわれ」内部の差別化である。多人種社会にもかかわらず、一体性を強めてきた要素は言語、習慣、宗教、そして共通の「主人＝敵」であり、「歴史的運命」を共有していたという意識であった。大陸規模での連合国家を構想したシモン・ボリーバルから、キューバの独立運動に身を捧げたホセ・マルティ、ニカラグアの反米闘争を指導したサンディーノ、そして、チェ・ゲバラに至るまで「われわれ」といった一体性の意識は、最近まで根強く発展してきた。

だが、このことはもちろん、大陸内部での紛争・対立や各国内部での差別化や支配・抑圧構造が存在しなかったことを意味しない。インディオや黒人などは社会の最底辺で苦難の歴史を余儀なくされた。外国の支配と干渉がラテンアメリカ各国の自立的発展を妨げてきたことは、アジアやアフリカの場合と同様である。20 世紀、とりわけ北方の巨人であるアメリカ合衆国の存在は圧倒的であった。

今日、ラテンアメリカは歴史的な意味で一つの曲がり角にある。1960、70 年代、この地域は、政治的にも、経済的にも、学問的にも世界的な注目をあびた。だが、80 年代以降の新自由主義路線が支配的となるにつれ、

ある程度、経済危機から脱出しつつあるが、貧富の格差が拡大、犯罪・暴力が蔓延している。「新しい社会運動」が発展し、「公共空間」を拡大し、民主主義の深化に結びついていくことができるのか。まさに、ラテンアメリカは過渡期にあるのである。ラテンアメリカ地域の研究を始めるにあたって、歴史的パースペクティブと国際的・構造的視角がとりわけ重要であろう。同時に、社会の底辺で呻吟している民衆の「声とまなざし」を探ろうとする姿勢や想像力は、傍観者の歴史認識を克服する上で大切である。この地域への関心の出発点は、音楽でも、スポーツでも、コーヒーでも、文学でもかまわない。それぞれが民衆の日常生活を反映している。各人が好きな扉を開けて奥に進めば、次の扉があるだろう。

2. 学習・研究の方法

われわれの世代(?)がラテンアメリカに関心を持った時代は、もちろんインターネットはなかった。まともな日本語の研究書もほとんど見あたらなかった。「ラテン・・・」と名の付く本はほとんど購入したが大部分は概説書。それはともかく、これからラテンアメリカの学習を始める場合、インターネットだけに依拠することはやめるべきである。インターネットへのアクセスは、第二段階の手段、あるいは補完的に考えた方が学習や研究にとって発展性がある。きわめてオーソドックスではあるが、新聞、雑誌、テレビなどマスコミが報道するラテンアメリカの情報に注意し、大学の図書館や共同研究室が所蔵する諸文献を日常的にチェックする習慣を身につけることが大切である。雑誌の目次を眺めるだけでも、問題状況やアカデミックな論争の状況がわかる。インターネットでは得られない貴重な副産物を発見する時もある。恒心館 5 階の共同研究室だけでも次のラテンアメリカ関係の雑誌・新聞がある。

1. 『ラテンアメリカ・レポート』(アジア経済研究所、年 2 回)
2. *Latin American Perspectives* (Sage Publications, Inc. 年 6 回)
3. *Journal of Latin American Studies* (Cambridge University Press, Quarterly)
4. *Latin American Research Review* (Latin American Studies Association, Quarterly)
5. *Bulletin of Latin American Research* (Blackwell Publishing Quarterly)
6. *Latin American Weekly Report*
7. *The Hispanic American Historical Review* (Duke University Press, Quarterly)
8. *Granma* (Weekly, 英語版)

さらに、スペイン語ではあるが、*Proceso* (Weekly) および *Foro International* (El Colegio de Mexico, Quarterly) がある。また、*Third World Quarterly* (University of London) や『アジア経済』(アジア経済研究所)においてもラテンアメリカについての研究論文がしばしば発表されている。

文献目録を活用することは学習・研究を進める上で不可欠であるが、次のものが便利である。まずは、これまでの日本におけるラテンアメリカ研究の蓄積と現状を把握するためには、アジア経済研究所編の『発展途上地域日本語文献目録』と『ラテンアメリカ地域日本語文献目録 1975~1985 年』がある。前者は、発展途上地域全体を対象に各地域・各国別、テーマ別の各年度の日本語文献を収録しているが、ともに最近の成果については不足している。上智大学イベロアメリカ研究所編『ラテンアメリカ文献目録』は 1974 年以降、今日までの文献を収録している。

最新の動向や情報を収集するためには、やはりインターネットの利用が欠かせない。ラテンアメリカ各国の新聞もインターネットでももちろん読める。重要なホームページをいくつか挙げておこう。

■ LANIC (Latin American Network Information Center)

テキサス大学ラテンアメリカ研究所のホームページで、充実したリンク集がある。

■ Latin World

ラテンアメリカ全域に関するリンク集。政治、経済、地理から観光情報まで幅広い。

■ Political Database of the Americas

ジョージタウン大学ラテンアメリカ研究センターのデータベース。

■ Latin American Newspapers

各地の主要新聞・ニュースソースのホームページを集めたサイト集。

3. 入門的な資料等の紹介

- 1) 大貫良夫他監修 (1987) 『ラテン・アメリカを知る辞典』 平凡社
■ラテンアメリカに関する多数の項目を収録し、説明する便利な辞典。
- 2) 松本重治監修・加茂雄三編 (1985) 『ラテンアメリカハンドブック』 講談社
■歴史、政治、経済、国際関係、社会、文化などを解説する文献。
- 3) 小池洋一他編著 (1999) 『図説ラテンアメリカ』 日本評論社
■ラテンアメリカの開発に関する基本的情報を提供。図表、資料が便利。
- 4) 加茂雄三編 (1999) 『ラテンアメリカ』 自由国民社
■現代的、歴史的視点を視野に入れて、テーマ別課題と地域的課題を手際よく記述。
- 5) 清水透編著 (1999) 『ラテンアメリカ』 大月書店
■歴史における主体としての〈南〉の一部を構成するラテンアメリカ、という視点からこの地域を再把握しようと試みる。
- 6) 国本伊代・中川文雄編著 (1997) 『ラテンアメリカ研究への招待』 新評論
■テーマ別、地域別研究のための入門書。参考文献解説が便利。

4. 発展的な資料等の紹介

- 1) 歴史学研究会編 (1993) 『南北アメリカの 500 年 (全 5 巻)』 青木書店
■南北アメリカ大陸全体を通史的に描いた日本で最初の試み。時代別の構成とテーマ別の構成を組み合わせ、両大陸史の巨視的流れを把握できる。
- 2) 松下洋・乗浩子他編 (1993~97) 『ラテンアメリカ・シリーズ (全 7 巻)』 新評論
■政治、経済、社会といったテーマだけでなく、子どもや環境も取り上げられている。
- 3) 後藤政子 (1993) 『新現代のラテンアメリカ』 時事通信社
■キューバ革命以降のラテンアメリカ現代史を、主に政治変動の視点から分析している。
- 4) 松下冽 (1993) 『現代ラテンアメリカの政治と社会』 日本経済評論社
■ポピュリズム、革命、権威主義体制、民主化など、現代ラテンアメリカの政治的動向を理論的視点を踏まえて分析・総括している。
- 5) 大串和雄 (1995) 『ラテンアメリカの新しい風』 同文館
■現代の民主化の流れの中で、社会運動や左翼思想の意味・役割を考察している。
- 6) 西川長夫・原毅彦編 (2000) 『ラテンアメリカからの問いかけ』 人文書院
■大航海時代以後の歴史的展開のなかで、ラテンアメリカの現在を考察した人類学者と歴史学者の共同作業。
- 7) 松下冽 (2010) 『現代メキシコの国家と政治』 御茶の水書房
■現代メキシコに関する本格的な研究書。とくにグローバル化と市民社会に焦点を合わせ国家と政治の展開を論じている。

以上は日本人の手によるラテンアメリカを全般的に対象とした文献のほんの一部にすぎない。個別テーマについても若干の文献を挙げておく。

- 8) エリック・ウイリアムズ (1978) 『コロンブスからカストロまで (I・II)』 岩波書店
■トリニダード＝トバゴの首相まで務めた経済史研究者である著者による古典的なカリブ海地域の通史。
- 9) ロランド・メジャフェ (1979) 『ラテンアメリカと奴隷制』 岩波書店
■黒人奴隷制の起源から廃止に至る歴史の変遷の全体像を再構成した古典。
- 10) A. G. フランク (1976) 『世界資本主義と低開発』 柘植書房
■賛否はともかく従属論を一躍有名にして話題を呼んだ文献。
- 11) アルフレッド・ステパン (1989) 『ポスト権威主義』 同文館
■ラテンアメリカの民主化過程やその特徴を理解するための基本書。

- 12) フィリップ・ベリマン (1989) 『解放の神学とラテンアメリカ』 同文館
■ パナマのスラムで司祭として働いた経験をもつ著者による解放の神学の優れた考察。
- 13) 歴史的記憶の回復プロジェクト編 (2000) 『グアテマラ虐殺の記憶』 岩波書店
■ 30年以上続いた内戦の犠牲者の証言を集め、暴力の実体と紛争の真実を明らかにしている。現代企画室から出版されているシリーズ〈インディアス群書〉は、先住民の記憶を掘り起こし、抵抗と主体的な歴史創造の試みを記録することにより、500年にわたる西洋や大国の抑圧と横暴を告発する文献を提供している。
- 14) グレグ・グランディン (2008) 『アメリカ帝国のワークショップ』 明石書店
■ アメリカとラテンアメリカの関係、とくに新自由主義政策の形成にこの大陸が果たした役割を分析したすぐれた専門書。

執筆者：松下 冽

執筆日(更新日)：2012年2月29日